A Nice Murder for Mom

ママ、手紙を書く

ジェームズ・ヤッフェ

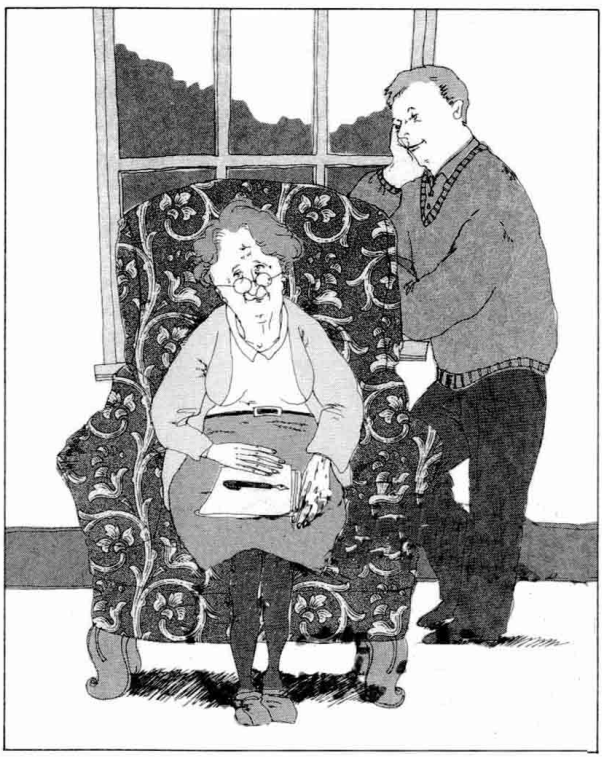
神納照子/訳

ANice iviurder for Mom

ママ、手紙を書く

ジェームズ・ヤッフェ

神納照子/訳



A NICE MURDER FOR MOM
by James Yaffe
Copyright © 1988
by James Yaffe
This book is published in Japan
by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.
by arrangement with James Yaffe
c/o Curtis Brown Ltd., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ママ、手紙を書く
著　者●ジェームズ・ヤッフェ
訳　者●神納照子
1992年11月20日　初版

発行所●(株)東京創元社
代表者平松一郎
〒162 東京都新宿区新小川町1—5
電話 03-3268-8231(代)
振替 東京 6—1565
装　画●朝倉めぐみ
装　幀●小倉敏夫
印　刷●旭印刷
製　本●鈴木製本

乱丁、落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

〈検印廃止〉

1992 Printed in Japan ©
ISBN4-488-01357-0 C0097

この仕事に十分な理解を示してくれたわたしの友
エージェントのロバート・フリードマンへ
感謝をこめて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

ママ、手紙を書く

登場人物

ママ……ユダヤの未亡人
デイヴ……その息子。公選弁護人事務所の主任捜査官
アン・スウェンソン……公選弁護人
マイク・ラソー……
サマンサ・フレッチャー……
スチュワート・ベラミイ……
} 英文科の助教授
マーカス・ヴァン・ホーン……英文科の主任教授
ルイス・ヴァレーホス……チカノの学生
フローラ・ヴァレーホス……その姉
ゾロ……？
マーヴィン・マクブライド……地方検事
ジョージ・ウォルコヴィッチ……地方検事補

プロローグ

最愛の息子デイヴィー、

今、ニューヨークへ帰る飛行機の座席でこの手紙を書いています。書き上がっても送るつもりのないことは承知の上で。

この二日間わたしは悩み続けました。この真実をあなたに告げるべきか？　わたし一人の胸の内に秘めておくべきか？　このままずっと心の底に封じ込めておいてはからだに毒、かと言って、もし真実を話せばあなたがどう出るかわたしにはよくわかっています。

そこで結論として、わたしはそれを全部手紙に書き、身の内から吐き出して、しかる後破り棄てることにしました。

わたしが問題にしたいのは誰が助教授を殺したかという点についてです。

いえ、なにもあなたに話したことが全くの嘘だったというわけではありません。わたしが二日前に話したことは全て本当のことでした。わたしの推理に誤りはなかった。我ながら見事な推理だったと言わせてもらいましょう。でも答えを組み立てながら、今一つすっきりしないものを感じていたのも事実です。推論の道筋からこぼれ落ちた二、三の小さな出来事が気になりました。

そしてついに知ったのです。こうした出来事もわたしが先に出した答えを否定するものではない、だが、そこにはもう一つ別の答えがあるということを。でもわたしはその答えを打ち明けるわけにはいきません。

あなたが、自身の手でその真実を暴き出すかもしれない、もう一度じっくり先週起こった出来事を思い返してみれば……

1

わたしの母親はずっと、わたしが〝プロフェッショナル〟な仕事につくことを望んでいた。職種は問わない、それがなんであれ、完全な〝知的専門職〟であること。〝商売人〟は絶対駄目、なのだった。

「あんたのおじさんたちも商売人だし、従兄弟たちも父さんもみんなそう。だけどちょびっとでも貯えのできた者なんていやしない」ママの口ぐせだ。「マックスおじさんみたいな別格もいるけど、あの人は勘定に入れられない。なにしろあんたがマックスおじさんやセルマおばさんみたいな、からだも神経もメチャメチャな人間になることを、神様はお許しにならないもの」

そんなわけで、わたしがまだ幼いブロンクスっ子だった頃から、ママはわたしに専門技術を身につけさせるトレーニングを始めたのである。誕生日には化学実験用具一式をプレゼントする。バイオリンの稽古に通わせる。休みの日には裁判所に連れていって公判の模様を見学させる。そしてついに、ママの一念岩をも通す。わたしは専門職についた。しかしこれが、どうやらあまり喜んではもらえなかった。ママはまさかわたしが警官になろうとは思ってもみなかったらしい。

なりたての頃はさんざん文句を言われた。日替わりメニューでケチをつける、が、そのほとんどはカムフラージュだった。ママが警官という職業を嫌悪する本当の理由は次の二点に絞られる。一つ、

危険な仕事であること。「ギャングだの、麻薬中毒だの、ノミヤだの、人殺しだの、コソ泥だの、そんなのばかり相手にするんでしょう。いつか怪我でもさせられたらどうするの？」

二つ、警官はわたしには相応しくないこと。「あたしが選んでほしかったのはもっと知的で、頭を使う仕事よ。警察の仕事なんて、誰が誰を殺したか当てっこしたり、公園で遊ぶ子供みたいにお巡りさんと泥棒の追い掛けっこをしたり、一人前の男のすることじゃないわよ。いっそおじさんの商売でも手伝ったほうが、少しはましに頭も使えるんじゃないの」

この意見を撤回させ、わたしの仕事がいかに尊厳と艱難辛苦に満ちたものであるかを語り聞かせる手立ては全くない。我ながらあっぱれな仕事振りで、四十を前にして警視に進級したが――記録的なスピード昇進であった――ママのからかい口調はいっこうに衰えをみせないのだ。

無理もない。なぜなら、実を言えばこのお巡りさんと泥棒の追い掛けっこ、ママにとっては本当に子供の遊びも同然なのである。誰が誰を殺したか当てるのも、ママにはお安い御用だった。そのごく当たり前の常識で、人の真意を探り出す天与の才で、なんぴとにも騙されないという能力で（これについては、ごまかし上手の肉屋とか、目付きのうさん臭い家主と長年渡り合ってきたたまものらしい）、警官が何週間もあちこち駆けずりまわって調べていた事件をママは夕餉の食卓でサラリと解明してしまう。

実のところ、わたし自身、自分のニューヨーク市警殺人課における本当の価値は、週日の五日間かけてやる骨の折れる捜査や、犯人捜しや、容疑者尋問などではなく、毎週金曜の夜に妻のシャーリイと一緒にブロンクスのママに呼ばれて晩飯をご馳走になりながら、目から鱗が落ちるような会話を交わすところにあるのではないかと思うこともあった。

この夕食会は長い間続いた。周辺が取り壊されて、やっとママが、ウエストエンド街の九十二丁目

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

に移ることを承知した後も続いた。ママは前のアパートにあったものを全部運び込んだ。新婚当時に揃えた重くて古い家具、色褪せた家族の写真、イギリスの風景やローマの遺跡の鉄板写真――。そしてまたすぐに、相も変わらぬ明快さで、クネーデル入りスープとアップルシュトルーデルの合間に事件も料理してくれた。

ところが、その二年後、状況は一変した。

わたしは仕事柄ほとんど日常的に死と顔を突き合わせている。死には慣らされているものと思っていたが、実はまるで駄目なことがわかった。シャーリイは病んで四ヵ月と持たなかった。妻が死んだ時、わたしはぼろぼろになっていた。

後遺症はいろいろあったが、その一つは、ニューヨークに住み続けるのがいやになったことだ。いや全く、理屈に合わない話だし、自分でもいつかこんな気持ちは自然に消えるだろうと思っていた。だが、駄目だった。そして、それにどう対処して生きていこうかと思案していた時、突然解決策が飛び込んできたのである。青天の霹靂――というのは、青天ににわかに起こる雷のように、神が人に与える突然の大事件だと洩れ聞いたことがある。これはまさにそんなふうだった。もしもあなたが神を信じていればの話だが。

わたし自身はあやふやな信仰心の持ち主だが、とにかくこの稲妻にはそっぽを向かなかった。出所がどこだろうと問題じゃない。

五年前のこと、ニューヨーク市警がわたしを調査技術シンポジウムに出席させるため、官費でメサグランデに派遣したことがある。メサグランデはロッキー山脈の山裾に広がる中くらいの町だ。国じゅうから集まった二百人ほどの警察官が一週間、郊外にあるビッグなリゾートホテル〈リシェルー〉に寝泊まりして、指紋や血痕や、最高裁を怒らせない容疑者尋問の仕方、といった内容の講義やセミ

ナーに出席したのである。夜は、だいたい飲んで過ごした。
このシンポジウムで、わたしはアン・スウェンソンという名の、メサグランデで検事補として働く若い法律家に会った。もしシャーリイとの間に娘がいたら、彼女くらいの歳になろうかというほどの若さだ。そんなわれわれだが、どうしたわけか、えらく馬が合った。法の施行と正義との関わりについての考え方が同じだったし、シンポジウムに参加している他の奴らはみんなアホばかりだという点でも意見が一致した。
その後何年かの間に二、三度手紙のやりとりをしたが、シャーリイが死んで三ヵ月近くたった頃、突然、そのアンから長距離電話が入った。彼女は今度、メサグランデの公選弁護人を務めることになったのだが――市議会との六年契約で、任意更新制――仕事を引き受けることをこの二ヵ月余り保留して説得のすえ、やっと、議会に公選弁護人事務所専属の調査員を置く費用を出させることに成功した。つまりこれまでは地方検事のスタッフに依存していた調査の仕事を、今後は全部アンのほうでやらなければならないということである。彼女はこの仕事をやってみる気はないか、と問い合わせてきたのだ。
わたしは電話を受けているその場で承諾した。給料は、ニューヨーク市警殺人課で貰っている額に及ぶべくもなかったが、一人暮らしの、女房もいない男にどれほどの金が要るだろう。
それになにより、これでニューヨークから離れられる。
ママがこのことをどう思うか、考えなかったと言えば嘘になる。ずいぶん悩んだ。わたしは一人息子だし、ママももう七十の坂を越えている。金曜の夜の食卓はいったい誰と囲むことになるのだろう？　わたしから事件の話を聞き、ウィットを駆使して、ママらしく楽しんだあの金曜の夜が果たしてまためぐってくるだろうか？

それで、わたしはママも来ないかと誘ってみた。ニューヨークには、はっきり言って、ママを引き止める魅力はないと力説した。そりゃあ、ご近所やシナゴーグ（教会）やブリッジ仲間の友達はいるだろうが、メサグランデにもシナゴーグはあるし、ブリッジ好きなら選りどり見どり。ママの社交性をもってすれば、新しい友達ができるのはあっという間じゃないか。

つまるところ、これまでは家族がいる町だからというのが彼女の大義名分だった。もうニューヨークには、その家族は一人もいない。今ではわたしがママのたった一人の家族だ――ママがわたしのたった一人の家族であるように。いや、シャーリイのほうの親族が何人かいたが、この連中についてはママもわたしもだいたい同じ意見だった。

ママはわたしの申し出に対して礼を言い、そのうち訪ねていくからと答えた。それも、山を見たいからではないそうだ――「あんなもの、なんの役に立つの？　もし神様が高いところに人間を攀じ登らせたいとお思いだったら、エレベーターなんか発明なさるかしら？」それより、本物のカウボーイやインディアンが見たいんだとのたまう（どっちの本物も、メサグランデじゃ、ちょっとお目にかかれないと言っても信じようとしない。だってあそこは「生粋の」西部でしょ？　とくる）。だが、今はまだ行けないと言う。用事が山ほどあって、当分暇はとれそうもないと言う。

わたしにはこの気持ちがよくわかった。これまで続いた生活のもろもろをそう簡単に置き去りにはできまい。たとえその一番大切なものは、もうないとしてもだ。そのうちきっと、わたしは自分にそう言い聞かせて、後も見ずに、飛行機に乗り込んだ。

翌年一年ばかりの間、わたしは月一くらいの割りでママに誘いの声をかけた。ずっとこっちに住んだらとまでは言わない、せめて二、三週間、遊びに来たらどう？　返事はいつも、ありがとうの後に、せっかくだけど、がつくものばかりだった。

そんなある日、二月ほど前の三月のある朝早く、ママから長距離電話がかかってきた。
「ねえ、デイヴィー、あんたの招待がまだ有効なら、訪ねていきたいと思うんだけど。でも、バスルームは本当に二つあるのね？」
「もちろんさ、ママ」
「きれいに磨いてあるんでしょうね？」
「しみ一つなし。週に一度掃除のおばさんを頼んでるんだ」
「どんな掃除女だか、想像がつくわね。よーし、まかせておきなさい。そっちへ行ったらあたしが小言を並べてやるから。飛行機で行くつもりだけど、空港まで迎えに来てくれる？　無理なら、空港バスを使うけど」
「車で迎えに行くよ、ママ。ここには空港バスなんてないんだ」
「あら、バスはないの？　じゃあ、ひょっとして、地下鉄もないんじゃない？」長い距離を隔てているとは思えないほどはっきりと、ママの洩らす慨嘆の吐息が伝わってきた。「いいわ、では明日の午後四時にね、会うとしましょう」
「なに、明日来るの？」
「いけない？　忙しいの？　大事件でも抱えているの？」
「全然。むしろ、来てもらうには絶好のタイミングだよ。ちょうど少し暇になった時だし。ただ驚いたのさ、あんまり突然だから」
「突然決めないで、いつ決めるのよ。そっちの気候はどうなの？　ネルの下着を持っていくべきかしら？　ゴム製のオーバーシューズも買っていったほうがいい？」
「そうだな、二、三日前に吹雪いたけど、もうほとんど雪も解けたよ。ほんとに、ここの冬はしのぎ

易いんだ。ニューヨークみたいな厳しい寒さや、うっとうしい天気とは縁がないからね」
いかにも信じられないというように、鼻を鳴らす音がした。「下着は持っていくわ。オーバーシューズはあんたの町で買えるでしょう、たぶん。ところで、なんて名前だっけ、そこは？」
「メサグランデ」
「それなあに、外国語の名前？」
「スペイン語ですよ、ママ」
「でも店の人なんかは、英語をしゃべるんでしょうね？」
「決まってるじゃないか。もちろん少しは訛りがあるけれど、でも慣れてしまえばよくわかる」
また鼻が鳴ったが、今度はやや穏やかだった。「一年くらいじゃ、あんたもそう変わってはいないでしょうけど、いつも通りの元気な顔を見せてね」
電話が切れて、ママに会える喜びでわたしの胸は騒いだ。だが心配も一つあった。滞在中のママを楽しませ、時間をつぶさせる方法がわからない。メサグランデには、大都会から来た旅行者の気に入るようなものはあまりないのである。
ママの今度の休暇を最高のものにする秘訣があるとすれば、それは殺人事件だ。複雑で一ひねりも二ひねりもした、ママ好みの難事件だ。

2

かくしてママ到着の前夜となる。それは、奇しくも殺人事件の前夜でもあった。

その夜はデートの約束があった。わたしはあまり外出はしないほうだ。ストレスが溜まらない程度に時たま、といえばおわかりいただけるだろうか。わたしはまだ、それ以上の付き合いを望む気になれなかった。いつかそうなれるか、否かもわからない。自分としてはそうなる時はなるし、今は現状維持でいくしかないと思っている。

デートの相手はマーシャ・ルイス。町でスキー用品店を経営している。年は三十代の終わり。わたしより一まわり以上年下の離婚経験者で、六歳の娘がいる。黒髪に、懸命な努力で保っているスリムなボディー。だがわたしが彼女を好きな理由は、その気安さだった。議論しかけてくるほどの考えや意見もなくて、一緒にいても、自分が話すよりこっちの話を聞くほうが好きで、おまけに、わたしのジョークを面白がってくれる。

マーシャのようなタイプに惹かれるのはおかしいと言われるかもしれない。なにしろ、わたしが二十五年間連れ添ったシャーリイは、ウェルズリーで心理学の学位を取っていて、資格を生かした仕事にはつかなかったものの、新しい知識を仕入れることには貪欲な女性だった。一つ、思いついた理由は、マーシャのストレス解消法がわたしのそれと一致しているという点だろう。たとえば、われわれ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c